

銅・アルミレポート

橋本アルミ株式会社取締役

橋本 健一郎



11月の銅の概況及び12月の見通し (3)

■国内概況まとめ

◆自動車生産

生産動態統計によると、10月の自動車生産台数は前年比-0.2%の77万6,072台。輸出は前年同月比+4%の37万1,559台。

◆自動車生産

日本自動車販売協会連合会によると、11月の自動車販売台数(軽除く)は前年比-6.1%の23万4,715台。

◆住宅着工戸数

10月の新設住宅着工は、持家が減少したが、貸家、分譲住宅が増加したため、全体で前年同月比3.2%の増加となった。また、季節調整済年率換算値では前月比10.2%の増加となった。

◆伸銅品生産

10月の伸銅品の生産量は、前年同月比3.5%増の5万9,750トン。5か月連続で前年同月を上回った。14品目中6品目が前年同月実績を上回った。

国内の自動車向けの需要は好調期に入っている。北米向けが好調だが、更に中国の自動車生産も回復しつつある。半導体は、AI関連データセンター向けが好調。また、スマートフォンは米中韓向けが引き続き良い。情報家電も回復してきた。このところ長く低迷していた中国の生活家電の需要の回復も見えている。ルームエアコンは、夏の販売が伸びたことから在庫が掃け、在庫積み上げ目的の生産が秋以降も続いている。パッケージエアコンは、建設関連で工事遅延の影響が続き回復が遅れている。また、新たに国内工場設備向けのバルブ需要の増加が見られるようになった。

◆電 線

出荷量	54,900トン(銅量ベース)
前年同月比	-3% 3か月連続マイナス

■輸出入動向

◆輸 出

電気銅	-20.8% 5万1,685 t
スクラップ	+54% 4万7,407 t

◆輸 入

電気銅	+24.9% 331 t
スクラップ	+38.1% 3万3,307 t

■見通し

◆自動車販売台数

国内向け販売は、年末に向けた節目の“買い替え”需要や、為替後押しでの価格競争力維持によ

り、少なくとも「横ばい〜若干プラス」で推移。特に軽自動車や低価格帯のコンパクト車、実用車が比較的堅調。中間層以下の購入層は「値ごろ感重視」で動きやすいため。

◆自動車生産台数

国内工場もこの需要に応じて、安定稼働あるいはやや増産。特に軽・コンパクト、実用車を中心とした生産に回帰。円安やコスト競争力を背景に、輸出向けも“効率的な品目”を絞りつつ継続。

◆伸銅品生産

世界経済は米追加関税の影響を吸収しつつ、最終需要は自動車・半導体を中心に再加速する局面。国内でも在庫調整が最終段階に入り、輸出環境も年末にかけて改善が進む。これらを踏まえると生産は5万9,000〜6万トン前後を見込み、下期のピーク水準を形成すると予測する。

◆電 線

2025年12月の電線生産は、建設・民需の低迷が続く一方、送配電投資と年末工事需要が下支えとなり小幅反発基調を予想する。出荷量は5万1千トン前後で、前年比はなおマイナス圏ながら減少幅は縮小。銅価の安定と在庫調整の進展により、底入れ感が強まる展開となろう。

■スクラップ景況予想

2025年12月の国内銅スクラップ需給は、町工場の現場感として「欲しい時に欲しい量が揃いにくい」状況が続く。国内回収は持ち直しつつあるものの、物流の遅れや高品位スクラップの偏在が解消されず、仕入れ競争が依然として激しい。一方で電線・自動車部品向けの需要は底堅く、加工現場では原料確保が最大の悩みどころ。結果として、需給はタイト基調が継続、価格は高止まりで推移する見通しとなる。

■LME予想

2025年12月のLME銅価格は、1トン=11,000〜12,000ドルを主レンジと予測する。米欧の利下げ加速によるドル安進行が非鉄市況を強力に押し上げ、年末にかけてCTA・マクロ系ファンドの資金流入が活発化する見通し。さらに、南米の鉱山稼働不安や精錬能力の制約により、物理需給は構造的タイトなまま推移。金融・需給両面の強材料が重なることで、銅価格は高値圏を維持しやすい環境が続くと判断する。

■為替予想 155円〜160円

2025年12月のドル円は155〜160円を想定。FRBの利下げペース鈍化で米金利は高止まりし、日銀は緩やかな正常化にとどまるため金利差は維持。年末にかけてリスク選好とドル需給が強まり、ドル買い優勢の展開が続く見通し。

銅建値に関しては1,750-1,964円程度と予測。